

南薫造と昭和 10 年代

寺本 泰輔

はじめに

仮に昭和 10 年代が戦争の時代でなかったら、南薫造の画家人生はどんなにか静穏で、悠々と画業に専念出来たであろうと思う。それは南薫造に限らず、あの時代を生きた画家なら、誰にでも言えることかもしれないが、画家として業績を重ねるにつれて戦時色が濃くなり、あらゆる面で不自由になっていく現実を、南薫造自身、どんなにか残念に思ったことであろうと推察するのである。

南薫造は、それでも官展系画家として、恵まれた画家人生としてのスタートを切った。広島県賀茂郡内海町（現・呉市安浦町）で医師の長男として生まれた南薫造は、広島市内に下宿して、旧制広島一中で学び、東京美術学校（現・東京芸術大学）に進み、卒業後すぐにイギリスに留学した。帰国後は文展（現・日展）で立て続けに入賞して華やかにデビューした。以後も順調な歩みを続け、帝国美術院会員、さらに母校・東京美術学校の教授となり、官展系画家としては申し分のない一生のように思える。それだけに時と共に背後から襲いかかる戦争の暗雲が、結局のところ南の画家人生を不運なものにしたといえよう。

南薫造が教授になった昭和 7 年当時、同校の油絵の教授陣は、ほかに藤島武二、南薫造の恩師でもある岡田三郎助、小林万吾であった。いずれも当代一流の画家達である。南薫造は昭和 16 年には、藤島武二の後を受けて油絵科の主任教授になった。

一方で南薫造が在職した昭和 7 年から 18 年までの在任期間は、改めて言うまでもなくわが国が「破滅」への道を歩んでいた時期でもあった。

- 昭和 7 年 上海事変と満州国建国宣言。海軍将校らが犬養首相を襲撃した 5・15 事件。
- 昭和 8 年 国際連盟脱退。小林多喜二拷問死。
- 昭和 9 年 ドイツでヒトラー大統領誕生。
- 昭和 10 年 美濃部達吉の「天皇機関説」事件。
- 昭和 11 年 陸軍青年将校の一団が斎藤実内大臣らを襲撃した 2・26 事件。
- 昭和 12 年 日中戦争始まる。南京事件。
- 昭和 13 年 国家総動員法公布。ドイツがオーストリアを併合。
- 昭和 14 年 ノモンハン事件。フランス・イギリスがドイツに宣戦して第二次世界大戦が始まる。
- 昭和 15 年 日本・ドイツ・イタリア三国同盟調印。大政翼賛会発会。「ぜいたくは敵だ」の標語叫ばれる。
- 昭和 16 年 日本がアメリカ・イギリスに宣戦布告。太平洋戦争始まる。大学・専門学校の修学年限短縮。
- 昭和 17 年 ミッドウエー海戦。第 1 回大東亜戦争美術展開催。
- 昭和 18 年 神宮外苑競技場で出陣学徒壮行会。

この年表は岩波書店の「日本史年表」（平成 7 年）によっているが、この間の「平和な話題」は、昭和 10 年の第 1 回芥川賞の受賞者に石川達三、同じく第 1 回直木賞受賞者に川口松太郎が決まったというものくらいしか見当たらない。それほど戦時・激動の時代であった。

南薫造がこの時代をどのように思って生きたかを具体的に知る資料は持ち合わせてはいない。しかし、若者が戦争に次々に駆り出されていく現実を、どんなにか辛い思いで見えていただろうことは容易に想像がつく。平和な現代にあっても、軍国主義の強圧的なあの時代は歴史の暗部としていつまでも記憶にとどめておかねばならない。

南薫造は昭和 18 年に職を辞して郷里の広島に家族や孫達と疎開する。その後東京のアトリ

エを空襲で失い、多くの作品も焼失した。戦後になって再度の上京もかなわず、疎開先の生家で昭和 25 年に 67 歳の生涯を閉じることになる。南薫造は昭和 6 年に 16 歳の長男を病気で亡くしているが、その悲しみとともに、戦争による画家としての実績の喪失は痛恨の極みであったに違いない。官展系画家として、見事なエリート・コースを歩んだ画家にして、戦争という不可避の不幸に遭遇するというのも、將に時代のなせるところであった、としか言いようがない。

南薫造の同世代の画家には、いわゆる戦争画との関わりが取り上げられているが、南薫造にはそうした作品は見当たらない。戦争画については、簡単には概括出来ないが、音楽や文芸にしても、戦争との関連を平和な時代から見る場合には、当時の状況の冷静な見極めと丁寧な実証が必要である。戦争画を戦争記録画・資料として理解してみても「(戦争協力への責任は)大勢としてはうやむやなうちに終わり、戦後の新しい動きへと一気に移っていった」^{*1}という現実が指摘されているだけに、とりわけそう思う。南薫造には、昭和 2 年に「広島大本営」という作品があるが、これは日清戦争の時、広島に臨時に大本営が置かれた史実を歴史画として描いたものであろう。

さて、今回展の「南薫造と教え子たち」展では、東京美術学校・南教室を 1939(昭和 14)年に卒業した同期生の渡辺武夫・荻太郎、1943(昭和 18)年卒業の同期生である野見山暁治・新延輝雄の 4 人を選考した。この 4 人は、それぞれの進み方で現代画壇にしっかりと存在を示した画家たちである。しかし、この 4 人のうち新延輝雄以外は、「師と教え子」という言葉から連想される通常の意味合いでの師弟関係とは少し違うものがあった。渡辺武夫は在学中から、光風会の寺内萬治郎に、荻太郎は新制作の猪熊弦一郎に師事した。野見山暁治は特定の師匠はもたず独自の道を歩んだ。

広島市に在住した新延輝雄だけは南薫造と同郷であったことから、小学生のころから薫陶を得ており、南薫造が生家へ疎開したこともあって晩年まで師事した。

教え子たちが画家としてそれぞれの道に進んだとしても、画家としてスタートした、いわゆる原点は東京美術学校であり、南教室であったことは事実である。南教室はいわば画家としての「本籍地」ということが出来ようか。もちろん彼らは南薫造を避けたわけではなかった。それどころか、渡辺武夫はかつて筆者が「南薫造論」を書くために取材した際、「南先生は名利にこだわらない超大家であり、遠くからいつも見守って下さった」といい、荻太郎は「先生は英国紳士の感じがあり、先生の教室に在籍しているだけで、私たちには励みになった」と懐かしんでいた。

美術学校であろうと、絵画塾であろうと、師弟の濃密な関係を築くケースは少なくないが、南薫造は細かいことは何も言わず、親分肌のタイプでもなく、まさに「遠くから見守る」先生であったようだ。ただ、短期的な組織ではあったようだが、卒業生を対象とした「南窓会」といったグループもつくられたように、学生との関係も大切にした。渡辺武夫が卒業後に光風会で、一般出品者からランクアップして会友になる時、南薫造は関係者に対して教え子の昇進のため熱心に推薦演説をしたというエピソードも残っているほどだ。こうした教え子たちのわが国の画壇における活躍も見ることなく、再度の上京もかなわず 67 歳で他界した。南薫造にとってはそれも大きな心残りであったのではないだろうか。

教え子たちも、直接間接を問わず戦争に翻弄された。渡辺武夫は 1940(昭和 15)年に召集されるが、即日帰郷、荻太郎は 1939(昭和 14)年の徴兵検査で丙種となり兵役を免れた。野見山暁治は 1943(昭和 18)年に召集されて中国に派遣されるが、病気になり現役免除となった。新延輝雄は兵

役にはとられなかったが、広島原爆で両親を失っている。

野見山暁治が長野県上田市にある戦没画学生慰霊美術館「無言館」の建設に深くかかわっていることはよく知られている。無言館は太平洋戦争・日中戦争によって画家への道を絶たれ戦没画学生 108 人の約 200 点の遺作等を展示している美術館である。野見山暁治は無言館の館主である窪島誠一郎との対談集^{※2}の中で「死の執行猶予を言い渡された若者がどのような生きてきたかというひとつの証言が大事(略)戦争という大きく重いものに押し潰された若者の、これは無言の訴えだ」と無言館設立の思いを述べている。無言館は「きけ わだつみのこえ」(日本戦没学生の手記)の美術版といえる貴重な存在である。

東京藝術大学には、戦時中の東京美術学校時代の詳しい統一的な年度ごとの教室別卒業生名簿は残されていない。しかし、同大学付属図書館に、今回特別に調査してもらった資料によって、昭和 11 年から同 17 年までの南教室の在学学生 75 人の名簿が分かった(本展会場に掲示)。

さらに、このうち南薫造の孫・南健の夫人の八枝子が克明に調査した資料^{※3}によると、無言館には南薫造教室出身者らの戦没画学生 13 人が登録されている。

渡辺武夫と荻太郎

この二人の南教室の同級生は、進んだ絵の道も作風も相当な違いがあったが、卒業後も親交を続けた。渡辺武夫は在学中から、寺内萬治郎に師事したことから、終生、光風会展、さらには日展を発表の場とした。最後は光風会のトップである理事長まで務めた。同会の広島巡回展では広島を訪れて後進の指導にも当たった。寺内萬治郎の父親は瀬戸内の島である呉市蒲刈町の出身であり、南薫造の生家はその島とは狭い海を隔てた同じ呉市安浦町である。渡辺武夫は期せずして

呉とは浅からぬ関係があったことになる。

作風は非常に几帳面で確かなデッサン力に支えられて、破たんのない格調の高いものである。初めは人物画に冴えをみせていたが、昭和 30 年からのヨーロッパ滞在で、風景画に転換していく。初めて見るヨーロッパの風景に大きな魅力を感じ取ったのである。人物画もさることながら渡辺武夫の風景画には「色面構成に知的なリズムがある」^{※4}といわれるほどに、風景画に冴えをみせた。

一方の荻太郎は、新制作という実力画家の多い会派にあって指導的立場にあり、一般的にいえば、半具象あるいは半抽象と呼ばれる画風で、「自らが『精神造型』と呼ぶ自由な表現の可能性を追究し続け(略)鎮魂、愛、祈り、救いといった、人間が人間である所以のものを単純化」^{※5}した。荻太郎がこうした作品を多く描いたのは、親友の手島守之輔の広島での被爆死が大きな要因という。「その死に荻太郎は十字架を背負った思いを描く」^{※6}。

手島守之輔は 1914(大正 4)年に竹原市で生まれ、東京美術学校で南教室で学び、同級の荻太郎と親しく付き合った。1943(昭和 18)年に郷里に疎開、終戦間際の 1945(昭和 20)年 8 月 1 日に召集され、5日後に入隊した広島で被爆死した。その劇的な死が荻太郎には深く刻みこまれたのである。本展には、手島守之輔を加えるべきであったかもしれない。残念ながら諸事情により、今回は見送らざるを得なかった。しかし、荻太郎と手島守之輔に焦点を当てた企画展を、広島だからこそ改めて開催したいと思っている。それも南教室が現代画壇へ残した深遠な歴史であろう。

野見山暁治と新延輝雄

野見山暁治と新延輝雄の二人は、昭和 18 年に南教室を卒業した同級生である。厳密に言えば、野見山暁治が 1 年先輩にあたるが、在学中に病気で留年したため新延輝雄と同時卒業となった。

卒業後の二人は戦中・戦後の混乱もあって、格別な交流もなかったし、また画家としても別々の世界を歩んだ。

野見山暁治は戦後、自由美術に出品、昭和 27 年から 39 年までフランスに留学、その間に第 2 回安井賞を受賞した。それからは無所属となって、特定の団体には属さず制作を続けた。その後、母校の東京藝術大学の教授をつとめ、平成 12 年には文化功労者に選ばれている。現代の洋画壇を代表する画家である。

これまでの長い野見山暁治の画家人生を総括することは容易ではないが、自然にしろ、身の回りのものにしろ、あるいは色・形にしろ、ものごとの本質を突き詰めようとする姿勢は一貫しているようだ。しかし、そのうえで「彼は積み上げたものを、捨てることに怯まない(略)むしろ手慣れることを恐れている」^{※7}といわれるほどに、同じところに留まることはない。作品は強く、時に厳しく「今」を問いかけてくる。

一方の新延輝雄は卒業後、広島に帰り直接的には原爆に遭わなかったものの、両親を失った。新延輝雄は「父親はいまだに、どこで、どのように被爆死したのかは分からない」^{※8}と、最後まで原爆の惨禍を引きずっていた。数年前から体調を崩していたが、今回の「南薫造と教え子たち展」開催に当たり、全面的な支援を受けた。しかし、残念ながら開催を待たず、今年 6 月 1 日に亡くなった。90 歳だった。

新延輝雄は南薫造とのかかわりにおいて、前述のごとく他の 3 人とは違って深く繋がっていた。伯父が広島一中で南薫造と同級生だったことから、小学校 5、6 年生のころから南薫造の薫陶を受け、念願かなって東京美術学校に入り、南教室で学ぶことが出来た。戦後になって瀬戸内海の海軍要塞化が解除されると、疎開していた南薫造は自由に瀬戸内の風景が描かれるようになったため、盛んにスケッチに出かけた。新延輝雄は何度かお

供をした。そのときのほのぼのとした同行記はエッセイ集「日時計」^{※9}に詳しい。

画家としての新延輝雄は日展系会派に属して活躍、多くの後輩を育て、広島地方で最初に日展洋画部門の審査員に就任するなど、常に広島画壇の先頭に立った。また、主宰した絵画塾「華光会」は、絵画指導に留まらず、戦後の広島地方の文化復興にも大きな功績を残した。

作品は「ハーフトーンの名手」との評価があるほどに、晩年になるほど淡い色調の画面が多くなっていった。しかし、それでいて重厚なタッチで均整のとれた作品を残した。対象としたのはフランスの田舎の風景で、多くはそこに老夫人と子犬を配している。「フランスの田舎には、戦前の広島のような古い町の落ち着きがあり、老夫人は母、子犬は私かもしれない」と語ったことがある。

野見山暁治、新延輝雄の二人には本展開催を機に、何十年ぶりかの再開を楽しみにしてもらっていたが、それはかなわなかった。

（てらもと たいすけ 呉市立美術館長）

- ※1 岩崎吉一「戦争記録画」(世界の美術 135 朝日新聞社 1980 年)
- ※2 野見山暁治・窪島誠一『無言館はなぜつくられたか』(かもがわ出版 2010 年)
- ※3 南八枝子『洋画家南薫造 交友関係の研究』(杉並けやき出版 2011 年)
- ※4 日野耕之祐「清澄なる渡辺武夫芸術の軌跡」(『渡辺武夫画集』日動出版 2000 年)
- ※5※6 加藤貞雄「人間愛の『精神造形』」(『荻太郎作品集』日動出版 2004 年)
- ※7 中村節子「自然の本質を突きつめるー野見山暁治の絵画世界」(『野見山暁治展』石橋財団石橋美術館・石橋財団ブリヂストン美術館 2011 年)
- ※8※9 新延輝雄『日時計』(中国新聞社 1991 年)